

吉井川上流域の稲作の始まり

町内ではほぼ田植えも終わり、収穫までが待ち遠しいことと思います。

さて、稲作は国内では縄文時代後期頃（約3500年前）には行われていたとされていますが、当時の稲作は畑で栽培する稲（陸稲）でした。現在のような水田による水稲農耕が始まったのは、縄文時代晚期に入ってからで、約2500年前とされていますが、近年の研究によりもう少し遡る可能性もあります。

縄文時代晚期頃に大陸から九州へ伝わった水稲農耕技術は、数百年という時間をかけて、日本列島各地へ広がります。それでは鏡野町ではいつ頃から稲作が行われていたのでしょうか。

岡山県では、岡山市の津島江道遺跡で縄文時代晩期の水田跡が見つかっています。県北では苦田ダムの建設に伴い発掘調査された、久田堀ノ内遺跡（久田下原）から見つかった弥生時代中期後半頃（約2000年前）の水田が唯一の明確な水田跡になります（写真1）。この頃にはすでに県北でも至る所で水稲農耕が行われていたのでしょう。久田堀ノ内遺跡の水田は、1枚の大きさや形

も不揃いで区画されています。これは県内の弥生時代中期水田の傾向でもあります。水田に水を貯めやすいよう工夫したものと思われます。

写真2は杉遺跡（杉）の弥生時代中期後半頃の土器の底に付いていた糊の痕です。土器を作る時に地面に落ちていた糊が付着したものではないかと。杉遺跡では水田跡は見つかっていませんが、穂摘具である石庖丁が出土していますので、付近に水田が存在したことは間違いありません。



写真1 久田堀ノ内遺跡の弥生水田跡（岡山県古代吉備文化財センター撮影）



写真2 杉遺跡の糊痕の残る土器



写真3 歌井の石庖丁

り、弥生集落の存在と、稲作が行われていたことが証明できます。

縄文時代には町内でも至るところに人々が生活していた形跡がありますが、弥生時代前期になると遺跡は激減します。これは県北全域に共通すること、色々な要因が考えられますが、その一つとして、水稲農耕の開始により水田を作りやすい開けた土地のある、県南の沖積平野に人々が集まったのではないかとということがあります。そして弥生時代中期後半頃に県北での遺跡数が激増しますが、これは稲作で安定した食糧の供給が可能になったことによる人口の増加や、金属器の普及などによる灌漑技術の向上で、山間部でも水田を作ることが可能になったことが考えられます。それにしてもおよそ2000年前に中国山地の最深部にまで水田開発を行い、集落を形成した弥生人のマンパワー恐るべしです。

参考資料…『久田堀ノ内遺跡』・『杉遺跡』発掘調査報告書

『鏡野町の文化財』

お問い合わせ先

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733

奥津歴史資料館企画展「久田堀ノ内遺跡」開催中

奥津歴史資料館では、現在企画展「タムで沈んだ遺跡Ⅲ 久田堀ノ内遺跡」を開催中です。久田堀ノ内遺跡は平成11、13年度に発掘調査が行われました。資料館では今回紹介した県北初となる弥生時代水田をはじめ、堀を巡らせた中世の居館跡など、注目される遺構・遺物をパネルや実物で紹介しています。是非お越し下さい。



奥津歴史資料館

鏡野町奥津82-1（奥津温泉街北端）

電話(0868)52-0888

開館時間…午前9時～午後4時30分

休館日…毎週月曜日・祝日の翌日

入館料…無料